

研 究 報 告 書

沖縄県立読谷高等学校

I 研究主題

やる気から波紋する学習意欲向上

～進路のしおり活用による進路指導を中心とした学力向上～

II 研究主題の設定理由

本校では平成 20 年度入学生より特進を 2 クラス設置し、当該年度以降は希望者が 80 名以上で、その上位 80 名の学力平均が一定以上である場合には各学年最大 2 クラスの設置となった。現在は、各学年 2 で合計 6 の特進クラスとなっている。特進各学年 2 クラス体制となった今、その学力向上並びに一般クラスの学力向上が大きな課題となる。つまり、特進クラスにおける「やる気」ある生徒、一般クラスにおける「やる気」ある生徒の意欲を引き出し、どれだけ全体に波及させることができるかということである。「やる気」や「学習意欲」の変化を具体的に図るのは困難である。この点は中間報告にて指導助言をされた上原昇指導主事からもご指摘を頂いた。よって、研究をより具体的な取り組みとするために「進路のしおり」「進路指導」を「学力向上」と結びつけ、副題にまとめた。

1. 研究主題定義

- (1) 「やる気」： 夢への目的意識とその過程における計画力
- (2) 「波紋する」： 生徒個人の「やる気」がその個人を中心にして周囲に広がる
- (3) 「学習意欲」： 新たな知識を取り入れ、自ら成長させようという気概
- (4) 「進路のしおり」： 高校 3 年間で視野に入れた書き込み式の冊子
- (5) 「進路指導」： ①進路講演会開催による進路決定に向けた意識高揚
②進路のしおり活用による生徒自身の自己理解促進
③進路情報の発行による具体的情報提供
④学年会との連携による早期進路決定に向けた取り組み
- (6) 「学力」： 高校生活のあらゆる場面において積極的に学ぼうとする力

2. 研究目標

「進路のしおり」を活用し、高校 3 年間で連続した時間であると実感させ、生徒個人の「やる気」と「学習意欲」を向上させることにより「学力」を高める。

3. 研究仮説

- (1) 生徒が進路を考えて日頃の学習を進める過程において、(2) 3 年間持ち上がる「進路のしおり」を作成し、活用（3 年間で念頭においた日程・計画表・学習時間・進路講演会感想の記入や各学期の評価や模試個人成績の記録、HR 担任や進路部との面談資料に）することにより、(3) 学習意欲のある生徒はますます意欲が増し、またその意欲は他の生徒へ影響し、全体としての学習到達度も高くなるだろう。

4. 研究仮説背景

- (1) 平成 20 年度 2 学期反省に、1 学年会から「生徒の家庭学習の量が少ないという

- 話があるが、その根底に目標が欠けている事が考えられる。そこで進路部が核となって、1年から系統立てて進路指導をするために LHR・総合学習等計画的に組んで欲しい。」との要望が出され、3年間を通して活用できる「進路のしおり」改編へと動いた。その際、「学年別進路指導年間計画」を月単位で掲載し、特に継続的な指導が必要とされる就職についても生徒の目を向けるよう工夫した。
- (2) 高校生活3年間の継続的支援が困難な中で、3年間連続して利用できる「進路のしおり」を活用することにより、継続的な支援の実践につなげたい。

5. 研究組織《省略》

Ⅲ 研究の内容

1. 1 学年会

「進路のしおり」を学年全体で効果的に活用し、生徒の自己理解を促す取組

(1) はじめに

今回、一学年会では希望進路の「未定」の生徒を一人でも減らし、自らの進路意識を高め、進路目標の早期設定を支援するため、改編された「進路のしおり」を一学年全体で効果的に活用する取組を行った。入学して間もない4月の「新入生オリエンテーション」「文理適性検査」、6月の「教育課程説明会」、年4回の「進路講演会」、3月の「進路ガイダンス」などで活用する。その具体的な取組を以下紹介する。

(2) 実践・取組

① 新入生オリエンテーション

入学して間もない4月に「総合的な学習の時間」を活用し、改編された「進路のしおり」の内容、活用方法について進路指導部の担当から詳しく説明した。そのことで「進路のしおり」が生徒の自己理解の身近なアイテムになる。

② 文理適性検査

本校の教育課程（2学年での文系理系コース選択）に鑑み、「進路のしおり」第Ⅳ編「本校で学ぶ教科」を活用し、教務部教育課程係と連携し、1学年全生徒に文理適性検査を4月に実施した。適性検査により、生徒の興味・関心や基礎学力など文理適性を総合的に診断し、文系・理系選択の参考資料とした。また、資料を5月の「三者面談」で活用し、6月に実施される文理選択調査にむけて生徒の意識の高揚を図った。

③ 教育課程説明会

本校では、2学年から自らの希望進路の実現に向け文系コース、理系コースのいずれかを選択しなければならない。そこで6月の教育課程説明会では教務部の教育課程係と連携し、一学年のLHRの時間で「進路のしおり」の第Ⅳ編「本校で学ぶ教科」について説明した。その主な内容は

- ・ 2年生になって、どんな教科・科目を勉強するのかを理解する
- ・ 自分の進路や将来に合わせて、コース（理系 or 文系）を選ぶ
- ・ 自分の進路や将来に必要な科目を選択する

ことである。その中で理系の主な職業や文系の主な職業を紹介し、その目標実現に向けて必要な教科科目はどのようなものがあるかなどを具体的に詳しく説明した。その取組の中で選択科目の内容や2学年と3学年の理科選択の流れなどを生徒が自ら見据えて文系理系の選択に臨む手立てとした。

④ 進路講演会

年4回開催される進路講演会で「進路のしおり」の第V編「THEワークシート」を活用し、進路決定に向けて～今やるべきこと～を確認した。高校1年は自己理解のときと捉え、「・自分の今までの足取りを振り返る・自分の性格と将来の生き方を考える・自分の興味・関心を知る」ことをワークシートに記録することで進路選択を意識づけた。

⑤進路ガイダンス

3月に実施する進路ガイダンスでは「進路のしおり」の第V編「THEワークシート」の「6. 自分の勤怠状況を記録しよう」「7. 自分の特別活動について記録しよう」「8. 実力テスト（全生徒必修）の成績を記録しよう」を一学年全学級で活用し、年間を振り返り次学年への”たすき”とする。

(3)終わりに

高校3年間の視野に入れた書き込み式に改編された「進路のしおり」を進路決定の有効で身近なアイテムにすべく一学年全体で共有し、活用する取組を実践してきた。その効果についての検証は今後の進路決定状況を見極めなければならないが、生徒たちが「進路のしおり」を身近なものとして活用する素地は出来たものと思う。今後はさらにどのような場面に於いて学年全体として活用するのが効果的なのか継続的に実践したい。

2. 2学年会 「進路のしおり」活用による学習意欲向上に向けて

(1)はじめに

生徒の自己理解を経て進路決定、学習意欲向上につなげようとする目的で「進路のしおり」が改編され、さらに改訂されてきた。従来の資料集としての役割から、生徒に活用され、記録され、「やる気」を引き出し、学習意欲の向上により「学力」向上につながる「進路のしおり」が完成されつつある。

しかしながら、内容の充実と裏腹に、職員は日々の多忙さと目の前の対応に追われ、その内容を十分に把握し、活用するまでには至っていない現状がある。そこで、2学年担任への聞き取り調査を行い、「進路のしおり」をさらに活用するための方法を模索してみた。

(2)聞き取り調査のまとめ（次ページ資料参照）

- ①担任の内容把握・活用のしかたの理解がまだまだ十分でない。
- ②LHRや総合学習での活用時間が十分とは言えない。（進路講演を除き2時間以下）
- ③進路講演の感想、模擬面接の資料としては、良く活用されているが、その他の内容がまだ十分に理解・活用されていない。
- ④何よりも、内容と活用方法を理解し、計画して取り組む余裕がない現状である。

(3)現状の課題と考察

- ①「進路のしおり」の理解と活用のための職員の学習会を充実させ、内容理解と系統的進路指導の方法を共通理解する必要がある。
- ②LHRや総合学習の時間で、少なくとも学期に2回程度は、学年に応じたテーマを設定して計画させ、全クラスで最低限の系統的進路学習が保証されるようにした方がよい。（LHRは、統一テーマの時間が多く、その他は体育館などの使用やレクなどの活用の希望が多いため、できれば総合学習の時間を確保した方がよい。）
- ③部活動等の中心メンバーとして一生懸命で、中だるみにも陥りやすい2年生に対しては、具体的でわかりやすく興味を持てるような進路情報を多く発信し、生徒が自主的に興味を持って取り組めるワークシート等を準備して、効果的な進路学習の時間が確保できるよう、進路・学年で協力して取り組んでいく必要がある。

- ④SHRや授業等、日々の学校生活の中で、しおりを活用させたり、学級通信を発行したり、進路情報や模試結果、勉強のしかたを話したり、新聞を読ませたり、職業につながる情報を流したりなどのキャリア教育を全員で取り組んでいく必要がある。
- ⑤総合学習の中に、進路学習の時間を設定することを検討したい。

3. 3 学年会「学力向上対策への取り組み」

(1) 本校における 3 学年の狙いと課題

①繰り返し「考えさせる」進路指導

今の高校生の進路観には、多様性を認めてよい部分と普遍的でなければならない部分があることを念頭に置いて生徒と接したいと考えている。生徒が、安易に妥協している時の力と第一希望先へ燃えた時の伸びしろまで踏まえた指導を目指し、そのために生徒の要望(進路希望調査)・進路のしおりを軸にした内面を深く掘り下げる進路指導の具現化を目指している。

②生徒の第一希望進路先への進路指導体制がまだ十分とは言えない。

進路希望調査における生徒のニーズに出口指導が追い付いていない面がある。

進路指導を行う際には、その学校・学年に応じた適切な指導を行う必要がある。

入学時は、国公立大学希望者が76名であった。その一方、進学・進路未定者も合わせて142名おり、その生徒たちにどう働きかけを行うかが課題として挙げられた。一年間本校で過ごしていく間に、国公立大学希望者は54名(前年から22名減少)となり、私立大学及び専修学校の希望者が増加している。進学未定者の増加は「進路」を真摯に考えている明るい兆しとも捉えられるが、進路未定者の増加は課題となる。

名桜大学の公立化初年度の影響も大きく、3学年になり国公立大学希望者が前年比12名増加した。入学時に抱いていた「国公立大学希望への回帰」も見受けられる。さらに進路未定者が22名まで減少している点からも、第一希望進路先を軸にした進路指導が有効に機能していると考えられる。

(2) 3 学年としての学力向上の捉え方

①生徒ひとりひとりのニーズに合わせた学力を身につけさせる。

学力の定義とは、第一希望進路先に決定するために必要な学力であることに加えて、多様な進路先から自らの適性を踏まえて、取捨選択する力を含む。具体的に述べると、数学が「苦手・嫌い」だから文系を選択するのではなく、本校における数学の教育課程を一通り学習した上で、自らの適性を鑑みる等が挙げられる。逃げや消去法の進路選択は避け、積極的で主体的な生徒を育てたい。

(3) 今年度までの取り組み

①全面改定編纂した「進路のしおり」を2学年から連続して使用している。

過去の自分を振り返ったり、現在の自分の立ち位置を確認したり、その他進路決定の拠り所として大いに役立っている。

②全職員による面接指導(面接アクションプログラム)・小論指導体制の構築

進路部主導のもと3学年を中心に全職員が協力し、生徒ひとりに対して、最低3回は面接指導が保証できる体制がほぼ確立できた。

③自学自習の精神を育む「軌跡のノート」の活用

本校では、以前ボールペン使い切り運動を提唱し、その時も効果を挙げた。今回はそれに加えて、同窓会や期成会の援助もあり、軌跡のノート活用を通して自学自習の雰囲気・実績を高めることに成功した。

(4) 研究の成果と課題

①成果

ア「進路のしおり」を2カ年連続で使用したことで、生徒のしおり活用状況が非常に改善された。前年度からの流れも有機的につながりを見せ始め、生徒が「進路のしおり」の活用を通して、自ら主体的に進路について深く考え始めることが多くなった。

イ「軌跡のノート」を活用する中で、自学自習の時間が著しく向上した。

ウ国公立大学をはじめとする難度の高い推薦入試や県内外の私立大学へのAO入試のノウハウの蓄積は今までも本校には伝統的であったが、小論文指導の地道な取り組みや「面接アクションプログラム」への取り組みとの相乗効果で、今年も堅実に実績があがっている。

エ特進クラスが2クラスになったことで、学年全体の中で大学進学への雰囲気が高まり、全体的な学力の向上が見受けられた。

②課題

ア「進路のしおり」はどうしても学校に置きっぱなしになる事が多いので、次年度は単年度で計上していた予算の中から、保護者向け用にもう1冊増やして、学校に1冊、家庭に1冊保管としたい。しおりの中身についても、さらに学級担任が指導に活用しやすいように改良を行っていききたい。

イ「軌跡のノート」の取り組みを継続的にこなっていききたい。

ウAO・推薦入試の形態は安易な選択をする生徒にはもろ刃の剣とも言えるので、最後の一般入試まで粘れるような強い覚悟と意志を持った生徒育成に向けて初学年から一貫して指導していききたい。

エ特進クラスの今後については、評価法も含めて、数値的分析を交えながら、発展的に検討を重ねていききたい。

4. 進路指導部～模試実績から見る学力の向上について～

本校は平成20年度より特進クラスが2クラス設置となり、今学年度2クラス設置で最初の卒業生を送り出すことになる。それに伴って、模試受験者も増加。また特進クラス以外の模試受験者も増加の傾向にある。そこで本稿では、過年度と比較しながら模試の実績を概観することで、総合的な学力がどのように変化してきたのかを見ていきたい。

(1) 1年生ベネッセ11月総合学力テスト(記述式)実施概況《省略》

(2) 2年生ベネッセ11月総合学力テスト(記述式)実施概況《省略》

(3) 3年生ベネッセ11月マーク模試実施概況《省略》

(4) まとめに

模擬試験を顧みるに、今年度は1・2年生が3～4回、3年生は、10回模擬試験を実施した。特に、3年生については、記述模試を取り入れて、大学入試の2次対策に備えた。現在本校は、国公立大学合格者の5.6割程度が推薦入試での合格者であるが、一般入試受験希望者も、本年度は過年度に比べて増加している。今後も模擬試験を積極的に取り入れ、一般入試にも対応した対策を強化していききたい。

さて、模擬試験を実施してみると、学年によって弱点とする科目が異なる点が見えてくる。1年生については英語、2年生では国語が、明らかに苦手としているようである。3年生については、理科系科目が明らかに低い。模擬試験は、本番のセンター試験に向けてのトレーニングであると同時に、個々人の弱点をいち早く見つけ出し、その対策を行うことにより、全体としての得点アップにつなげていく役割を担う。ただ回数をこなしているだけでは、実力アップにつながらない。受験生は、個々人の弱点を早期に見つけて、その対策に当たる。そして我々も模擬試験実施後の生徒への細やかな受験指

導を念頭に、弱点部分に対応した各教科の演習授業展開や、対策講座の開講を考えていかなければならない。模擬試験の事後指導の重要性を、生徒そして我々教員も一層認識していくべきであろう。

さて、模擬試験の結果だけですべてを判断することはできないが、特進2クラス設置後の読谷高校全体としての学力レベルは以前と比べて確実に上昇してきていると思われる。そして、2クラス設置による、その他のクラスのレベル低下や学習意欲の低下といった懸念も、3年生模擬試験受験状況(特進以外からの受験者は15名～20名)、センター試験受験予定者(全体として104名/普通クラス24名)を見る限り、影響は出ていない。少しずつではあるが、当初私達が意図した「特進クラスのやる気」が「一般クラスのやる気」に波紋しつつある手ごたえを感じるようになった。しかしながら全体として、あと一息のレベルアップが必要と思われる。やはり、1・2年次からの自主学習時間の確保、早期の進路決定に向けた取り組み、生徒の学習意欲の向上を図る学校全体としての取り組み、早朝・放課後講座のさらなる充実など、生徒のニーズに対応した進路指導の必要性を感じている。今後さらに、校長・教頭をはじめとして、担任、各部・学年が連携しながら生徒の進路実現に向けて取り組む姿勢を構築、堅持していきたい。**【進路調査質問項目と分析】《省略》**

5. 教科・部活動

(1)部活動 「学習習慣の定着」― 部活動を通して学習意欲の向上を図る ―

①対象：女子バレーボール部。1年生15名(特進3名)2年生11名(特進4名)計26名、素直で向上心のある元気なチームである。

②方針：目指すところは、部活動を通しての礼儀作法、仲間づくり、社会に貢献できる人間形成である。そして、バレー部としての自覚と集団意識を持たせ、互いを思いやる人間関係の育成である。日頃の練習では、学校生活・私生活の行動そのものが、バレーボール技術向上につながることを生徒にも意識させるように指導している。

③取組

4月 赴任して文武両道を条件に女子バレー部顧問を引き受けた。しかし、部活の練習は一生懸命であるが、家庭学習の習慣がない生徒が多くみられた。そこで、生徒の学習の習慣を身に付けさせるきっかけとして、部員全員で家庭学習に取り組むことを促した。

5月 平日の家庭学習30分、土日祝祭日の家庭学習2時間を設定し、勉強か読書のどちらかを部員に選択させた。家庭学習の目安時間を設定することで、読書時間が増え、読書するのが楽しいという部員が増えた。しかし、家庭での学習時間を確保できない部員もいた。そのような生徒のために、勉強時間が確保できるように部員全員での勉強会を設定することにした。全員で実施することで勉強時間の確保、さらに継続することで学習習慣の定着を図ることができると考えたからである。

6月 部員全員で早朝勉強会(勉強・読書)を実施。現在も継続中である。人間のやる気や意欲向上は人間関係に大きく関係すると考えている。互いを思いやる人間関係をつくることで意欲向上につなげていきたい。そのため勉強会において、わからない人を教える雰囲気づくりを徹底した。わかる楽しさや教える喜びを感じさせ互いに感謝できる人間関係の育成を心がけた。

8月 夏休みの前半は、学校の宿題を終わらせることを指示した。後半は、自分のやりたいことに挑戦する時間とした。(全員学校で2時間、個別で2時間と学習時間1日4時間を設定)夏休み期間中は、遊ぶ時間がなかった、家にいる時間が少なかったなど、部活と勉強時間を設定することで時間の拘束が厳しいと感じていることが分かった。しかし、計画的に勉強をすることができた、挑戦したい資格の勉強時間がつくれた、部員の絆が深まった、勉強・読書の時間が増えた、休みでも普段通りの規則正しいリズムで行動できたなど、良かったという意見の方が多かった。

④アンケートから

学習時間の確保以外で取り組んだことがある。生徒が自主的に勉強に取り組めるように試験や学期ごとに自分自身を振り返らせた。振り返りの方法としては、勉強会を通して自分の変化や気付いたことをレポートで提出させた。生徒の思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から、部員全員でディスカッション・ブレインストーミングなど、自分の意見を発言・発表する機会を多く取り入れた。また、「勉強方法がわからない」との部員からの意見で、個人の勉強方法をレポートさせ発表させた。たくさんの勉強方法を知ることができ実践したい、自分自身を見直すことができた、同じやり方の人が何人もいて自信がもてたなど、この取り組みは生徒から好評であった。

勉強会についてのアンケートで最も多かった意見を以下に述べる。アンケート内容として、継続している理由・勉強会に取り組んでの感想・家庭学習(バレー部以外の時間)・成績関係・生活習慣リズム・部活を通して変わったことに分け生徒の意見を記入させた。バレー部員26名である。

成績に関しては、小テストや試験などの成績・学期末の評定が上がった(19/26)、評価が上がることで生徒の自信につながる意見が多かった。また、早寝早起きができるようになった、朝食をとるようになった、体調が良くなったなど、規則正しい生活習慣の形成につながっていることを生徒が実感している。部活を通して変わったことの中に、自ら進んで挨拶をするようになった、汚れている場所があれば自分から清掃するようになったなど、思っても行動にできなかったことが、今では主体的に行動できるようになったという意見が多くみられた。

⑤まとめ

部の活動として勉強会や様々な活動に取り組み、部員の学習習慣の定着につながっている。また、部の活動自体も部員の意識や意欲が向上していると私自身も感じている。さらに、朝の勉強会をはじめ、規則正しい生活習慣が身に付けられた。私は、文武両道をかかげ日々努力している部員に感謝したい。

現在、部員で主体的に資格取得に挑戦する雰囲気づくりに取り組んでいる。今後もさらに学習意欲が向上・維持できるように挑戦していきたい。

それから、部員が向上心を持ち続けられる大きな力に、顧問として感謝していることがある。それは、與那覇校長・比屋根教頭はじめ、多くの先生方から頂く温かい激励である。部員にとっては、この激励こそ心の糧となり大

きな自信につながっていると感じている。「バレー部が褒められていたよ」と顧問の嬉しい気持ちを伝えながら部員を褒めることができる。褒められることで部としての意識や意欲がさらに高まり、新たに挑戦する意欲にもつながる。この場をかりて皆様に感謝したい。

今後も部活動を通して、学習習慣の定着をさせていきたい。自ら学ぶ意欲を育て、豊かな表現力と粘り強さをもつ、部員の育成に全力を尽くす。

(2)教科 国語

①現代文習熟度別少人数展開入替授業実践

ア. 対象：3学年普通クラス（文系5・理系1の合計6クラス）

イ. 目的：習熟度別少人数にすることにより「わかる授業」を目指すと同時に、定期考査毎のクラス編成により生徒の「やる気」を促す。

ウ. 形態：2クラスをA、B、Cで3展開し、人数は32、28、20名にそれぞれ設定し、習熟度別で授業を行った。さらに、毎定期考査後の成績により入れ替えを行い、クラスを再編した。

エ. 授業：読解力や語彙力があると判断されるAクラスにおいては教科書を早めに進め、大学入試問題等にも取り組んだ。Bクラスでは読解力と語彙力養成に主眼をおき、作品構成理解のため、まずは個人で形式段落から意味段落まとめの作業、次に同じ過程をグループで検討という2段階で教科書中心に読解作業を進めた。Cクラスではやや教師主導で授業を展開した。教科書読解に際しても、説明事項をしっかりと板書し、比較的易しい説明となるよう心がけた。

オ. 編成：《省略》 カ. 確認：《省略》

②授業アンケート【2010年12月実施】《省略》

③まとめ

ア. 今回の取り組みは総じて成功したと考える。上記「アンケート分析」(イ)(ウ)を見ると、「習熟度別少人数」展開を生徒は肯定的に受け止めていることがわかる。また、「アンケート分析」(ア)でも生徒はクラス替えを一つの励みにしていたと推察できる。

イ. 結果としての生徒の「やる気」については「アンケート分析」(エ)の分析をさらに考察しなければ何とも言えないが、現時点では「生徒のやる気は高まった」と判断したい。

ウ. 「アンケート分析」(オ)における「読解力」の向上については更に取り組みを強化する必要があり、「表現力」の向上についてはもう一歩踏み込んだの指導方法体制の検証・研究が必要である。

エ. 今回の試みが成功裡に終えることができたのは偏に教務部情報係の協力によるものである。定期考査毎にクラス替えを行うということは、教科出席簿の変更も伴うことになる。その都度の快く「登録作業」に対応してくれたことに感謝する。ありがとうございました。

6. 進路講演会・学習会

(1) J5進路講演会《省略》

(2)夏期集中学習会

①進路講演会 《省略》

- ②平成21年度 第1回夏期集中学習会日程《省略》
- ③平成22年度 第2回夏期集中学習会日程《省略》
- ④平成23年度 第3回夏期集中学習会予定《省略》
- ⑤アンケートについて《省略》
- ⑥まとめ

今学年度で第2回となった「夏期集中学習会」は、平成20年度までは宿泊を伴う「夏期宿泊学習会」であった。平成20年8月の職員会議にて、以下の理由を説明し、宿泊を伴わない学習会とした。

- ア 生徒の健康・安全管理
- イ 保護者の経済的負担軽減
- ウ 宿泊施設予約困難（特進クラス増加の影響）
- エ 講座担当・学習会運営担当職員の負担軽減

ただ、宿泊を伴わないため先輩・後輩の親睦を深める時間が設定できなくなった。そこで、夏期集中学習会を「全体会」と「学習会」に分けて特徴を出すことを試みた。「学習会」は宿泊を伴う場合とほぼ同様であるため「全体会」に工夫を凝らした。つまり「全体会」に2つの講演会を開催したのである。1つ目の「講演会Ⅰ」では講師を本校卒業の国公立大学生に絞り、「受験体験談」や「大学生生活の紹介」そして「大学進学の意味」を後輩へのメッセージとしてあくまでも学生の視点から語ってもらう。その際、県外国公立進学者へはビデオでの参加をお願いした。「講演会Ⅱ」では、実際に国公立大学に勤務する教授により踏み込んだ「大学進学の意味」と「大学生活の実際」をお話しいたきながら、「夏の大切さ」や「高校時代にやるべきこと」を講演していただいている。講師依頼は前年度3月の大学訪問に際して行った。

この「講演会Ⅰ・Ⅱ」で参加生徒の「やる気」が奮い立ち、「学習会」での「意欲向上」へとつながり、さらにこの意欲が本校全体へ「波紋」し、「学力向上」となるよう期待しており、正に「現在進行形」の状態であると考えている。

7. 講座・模試

(1) 志望理由書・小論文講座

(2) 面接対策アクションプログラム＜「進路のしおり～BrushUP "D"」への記録＞

面接対策を希望する生徒へ入門 DVD 視聴から始まり、その後3回の面接実践を行う。面接指導担当は進路指導部が割り振るが、時間や場所については面接対策希望生徒が直接担当のもとへ 赴き、頭を下げお願いして面接予約をとる。

＜「進路のしおり」21年度版：72頁・22年度版：47頁＞

◎進路指導部にて「面接対策アクションプログラム」希望表にて申し込む。

- ①進路指導部より「面接 DVD」を貸し出し、生徒各自で面接について学習する。
- ②実践第1段階として、HR 担任や志望理由書指導担当が面接練習を行う。
- ③実践第2段階、進路指導部を始め全職員が面接官を担当し、生徒を鍛え上げる。
- ④最終面接練習、校長、教頭、各学年主任、進路主任が担当し本番に備えさせる。

*生徒は「進路のしおり」の記録欄に面接での指導助言をそれぞれ書き込み、次の面接に役立てる。一方、この記録は、次の面接指導者が前回における指導事項を素早く把握するのにも役立つ。

⑤面接指導回数《省略》

(3) BupDvd 講座

本年度（平成22年度）より、生徒の放課後の自学自習用として代々木ゼミナー

ルの講義 DVD を視聴できるようにした。本年度は「美ら島総体」があり、職員も総動員態勢であった。よってその対応に「BupDvd」講座を企画し、自主学習を促した。ただ、本年度からの開始のため、対象は3学年のみとした。希望者は登録し、教科書を購入すれば誰でも受講できるため、2月以降は1、2学年にも募集を呼びかける。

(4) 卒業生と共に模擬試験受験【平成22年度】

本校では卒業生が3年生と同じ教室で模擬試験を受験することを認めている。

(5) 実力テストの活用・分析

ア スタディーサポート 平均点偏差値推移 学年間（国数英）《省略》

イ 1学年考察

1年生は第1回と第2回の実力テストを比較すると偏差値が大きく上昇しており、ここ数年と比較してもっとも高い。家庭学習時間も比較的高いため、日ごとの家庭学習の成果が表れているといえる。この調子ならば今後が期待できるものと思われるが、4月に比べると9月では学習時間が半減しており、その対策をきちんと取り組んでいきたい。

ウ 2学年考察

現2年生も平均点偏差値は上昇傾向にあり、現3年生の同時期の偏差値を上回るなど、大いに期待できる学年である。しかし、入学時と比較すると家庭学習時間の落ち込みが大きく、ほかの学年と比べても少ない傾向にある。今後成績が落ち込むことも考えられるため、中だるみ対策と潜在能力の引き出しに注意を払っていきたい。

エ 3学年考察

現3年生の平均点偏差値をみると上昇傾向にあり、既卒1年の学年と比べても大きく上回っている。しかし、学習到達レベルを見ると「C2」と、国公立大学挑戦レベルの「B3」には達していない。また、3年生になっても家庭学習の時間に変化が見られず、休日ですら1時間にも満たない数値結果である。これには「学力を要しない安易な進路選択」等、種々の課題を含んでおり、受験指導だけでなく、確実な高校基礎学力の定着指導にも深く関わっている。今後学校全体での取り組みが必要であると思われる。

オ まとめ

各学年とも平均点偏差値は上昇傾向にあるといえる。2学期の実力テストでは各学年ともB3以上の生徒が80名はいる。これは学年の1/4の生徒は国公立合格の可能性を秘めているということであり、今後期待が持てる結果である。各学年の同じ時期で家庭学習時間と成績を比較すると、この二つは比例する傾向があり、今後の成績上昇のためにはやはり家庭学習時間をどう確立させるかが大きな課題であるとする。学習時間については学年が進行しても増加する気配がなく、特に3年生になっても増加する傾向がないのは問題だと考える。本校は部活動も盛んであり、部活動と学習活動の両立のためにも、メリハリのある行動を取らせるよう職員が連携して取り組まなければならないだろう。入学当初のやる気を持続させ、高校に入学した意義、そして進学を含めた将来に向けての人生設計の重要性を認識させるとともに、希望進路の実現に向けていかにモチベーションを持続させ、やる気をアップさせることができるかが今後の飛躍の大きな課題であると言えよう。進路指導部を中心に職員の統一した認識のもと生徒の夢実現にむけて今後も努力したい。

8. その他

- (1) ボールペン使い切り運動 《省略》
- (2) 進路情報の発行 《省略》
- (3) 特進クラスの充実 【学習特進推進委員会記録参照】
- (4) 県外国公立大学訪問 《省略》
- (5) 「進路のしおり」改編 《省略》

9. 読谷村学力向上対策実践報告会を通して

読谷村教育委員会は毎年2月に学力向上対策実践報告会を開催している。報告発表会場の鳳ホールでは、「幼小中の学力向上」への取り組みが紹介され、義務教育各校が一丸となって取り組む情熱が伝わってくる。県立高校ではある本校だが、與那覇健勇進路指導部主任（現本校校長）の時より、実践報告書に原稿を掲載し、報告発表の機会も頂いている。そしてその後を引き継いだ比嘉良一進路指導部主任は、平成19年2月2日の読谷村鳳ホールにて「読高ダイヤモンドプロジェクトⅢ～『夢』の実現できる学校を目指して～」と題し、以下のように報告を行った。

～中略～

上表の「Ⅱこれまでの決定状況」は、上段の表では各年度12月時点と終了時点の本校3年生の進路決定状況を各進路先決定者の人数で示してある。また、その下段では「○進路決定率」として、年度終了時点と12月時点での決定率を比較し、さらに国公立大学の詳細資料を掲載した。まず、12月時点での専門学校進学者が22年度は95名と21年度の123名から大きく減っている。一方、大学進学者は22年度は99名と前年度より25名増加。さらに、大学・専門学校の県外進学者数を比べると、平成22年度は72名と前年度44名から劇的に増加している。そこには生徒の「J5進路講演会」記録にあるよう、進路講演会で刺激された「進路意識の高まり」があり、また、特進クラス増加と県外国公立大学訪問による情報提供もその一因となっていると考える。

10. 職員アンケートより

本年度職員アンケートは7月と11月に行った。残念なことは全職員のアンケート集計とはなっていないことである。今学年度前半は「美ら島総体」、その後は「創立60周年記念式典」に向けて取り組むという状況によったのかもしれない。それでも下記の7月と11月のアンケート結果を比較すると、職員間の共通理解は深まっていることがわかる。

職員アンケート（コメント欄） 《省略》

IV 研究の成果と課題

中間発表指導助言に際し、上原指導主事より次年度の研究に向けた明確な方向性をいただいた。中間発表では本校実態把握に力点を置き「現状の提示から、課題解決への方向性を求め」ることに終始していたため、この指導助言は大変ありがたいものとなった。

そこで、まず、「今回の研究テーマは進路のしおり活用による進路指導を中心とした学力向上」であり、「間接的な方法によって生徒の意欲を向上させる」ことであることを全職員で確認した。そして「その波紋が広がることで学力向上につながっていく」ということがあくまでも「間接的な方法によって生徒の意欲を向上」させての「学力向上」への道筋となるかを検証することとなった。

1. 研究の成果

(1) 職員間の共通理解が深まったか。

前章「V研究記録」の職員アンケートを見ると「学力向上」と「進路のしおり」活用に関する共通理解が深まっていることが伺える。これは本研究に取り組んだ大きな成果である。特に、職員アンケートのコメント欄に多くの書き込みが寄せられたことは特筆すべきことであり、11月職員アンケート「8」へは前向きなコメントが寄せられた。背景には職員間の共通理解が前提があると考えられる。

(2) 生徒の意欲が向上したか。

J5進路講演会や夏期集中学習会を通して、生徒の学習意欲は向上していると推察できる。本年度3年生の大学進学者増加はその兆候である。さらに、特進クラスが中心となって参加する夏期集中学習会への参加も増加傾向にあり、そのアンケート結果からも学習への意欲高揚が伺える。

(3) 学力向上につながったか。

本校生徒の「やる気」を数字ではかる事は難しい。ただ本紀要の各報告は「やる気」を出させるよい取り組みとなっていることは間違いない。その各研究実践を踏まえて、実力テストや模擬試験結果を分析すると、学力は向上していると判断できるのではないか。ただ、本研究の研究主題副題「進路のしおり活用による進路指導を中心とした学力向上」へと繋がったかは明確ではない。ただ、「やる気」は「波紋」となり、確実に「学力向上」へ向かっていると実感する。

2. 研究の課題

最後に、11月職員アンケート「8」のコメントから、「進路のしおり」と「学力向上」を結びつけるための意見を紹介し、来年度以降の課題とする。

～中略～

上記の意見は、「3年間継続活用」「定期的活用」「1年からの活用」の必要性和活用のための時間確保の希望に集約できる。来年度は学年会と進路指導部がさらに連携することが求められる。

3. おわりに

1学年会から充実した進路資料作成要請を受け、3年間持ち上がりの「進路のしおり～BrushUP"D"～」を作成することとなった。するとある年度に3年間継続使用する「進路のしおり～BrushUP"D"～」に切り替えなければならないため、当該学年の2、3年生はそれぞれ2年から1年の使用しかできないこととなる。それが昨年度卒業生と現3年生である。そこで研究指定校予算は昨年度の2、3年生の「進路のしおり～BrushUP"D"～」費用に充当し、本研究に際しての先進校視察などは一切行っていない。

本紀要をまとめるにあたっては「物語性」を重視した。延べ8名の発表者がそれぞれの研究報告を完結した形で行い、共通テーマのもとそれぞれの世界を印象づけると考えたからだ。実はこれを結びつけているのが「進路のしおり～BrushUP"D"～」ではないかと思う。つまり、「やる気」という抽象的な概念の具現化を「進路のしおり～BrushUP"D"～」に求めたのである。そこで、多少強引ではあるが副題を「進路のしおり活用による進路指導を中心とした学力向上」とした。

「進路のしおり～BrushUP"D"～」は研究指定校の下で作成した。平成21年度版作成にあたっては「沖縄県下で活用できる作品にしよう」という声が進路部内に響いた。今後あらゆる場面で進化した「進路のしおり～BrushUP"D"～」に出会うことを期待している。沖縄県立読谷高等学校全(前)職員に感謝の意を表し、結びとする。



